

書評・紹介

「人間とはなにか」(石原静子著)について

山崎 昌 甫

この本のはしがきに、石原さんは、「私は教育そのものから一歩しりぞいて、人間についてゆっくり考えるページを贈りたい」「人間を考える——動物とくらべて人間とはなにか——」……を……私の専門に近い動物との比較を中心にして、できるだけわかりやすく……というのは、熱心な先生たちが、疲れて帰ってそれでもなお活字に目をさらそうときれるとき、さりげなくやさしく話しかけたい。そうして、一しよに考えてゆきたいと思っ「て筆をとったと書いています。まいにちまいにち、なまみの、そして具体的な人間をあいだにしている私たちは、「いったいこの子は……」という悩み、「そもそも教育というのは、いったいなんなのか……」といった疑問をもちつづけているわけですが、この本は、そういう悩みや疑問の奥底にある、動物とはちがった人間、しかしまぎれもなく動

物としての人間の本性についてのわれわれの関心に焦点をあわせ、それを「教育そのものから一歩しりぞい」たところから問題を出発させ、ついで『人間を考える』のは、人間を被験動物のように客体として見て、どこまでわかったとつめたきうためではなく、われわれの直面する問題を少しでも解決するた「め」の方向をさぐる、という方法をとっています。おそらくこのような議論の展開のしかたが、かえって一人ひとりの子どもの明らかな可能性を、教育という積極的で、創造的な仕事こそが現実のものにしうる、という希望をあたえてくれるように思うのです。石原さんの本領は、「シロネズミの脳どこを切りとったら行動にこういふ変化が起った、という実験報告を書くときには、それがやがては遠い遠い道をまわって人間の問題の解明に役立つだろう、と頭のすみであたたかく感じていた

としても、私はそれをベンにのせることを極力セーブするでしょう」というように書く研究者としての厳格さにあるのかもしれない。しかしその専門の実験心理学そのものから一歩しりぞいて、教師である私たちとゆっくり考えあうということのなかで、かえって、人間の本性にかかわるいくつかの側面を、教育の問題の解明に役だつかたちで提示しているように思えるのです。そして、ときには猿の河原の石積み似たような空しさを感じる毎日の教育実践に、ある確かな座標軸を与えられたような気さえするのです。これはけっして私だけの気持ではないかと思えます。

この本のもとなっているのは、ご存知のように、この雑誌に連載された十回にわたる話なので、ここで内容についての詳しい紹介はひかえることにしますが、まだおよみになっていない方がたのために、私なりの整理をしてみましよう。

第一話は、「生存について」書かれています。人間が「農耕や飼育による食物の確保」と「医学衛生学による病気の治療と予防」の知識、技術を獲得することによって、多くの動物にみられる多産多死型の生存様式を克服

し、少産少死型、つまり、「生活の仕方をみずから運ぶ自主性」を確立しえたことを基調にして、ヨーロッパおよび戦後の日本とアジア、アフリカ、中南米との間の生活隔差を、「社会経済的な視野に立ったたくさんの人びとが同時に行動を起さないと……ヒューマニステックな貢献には、どうしても限界がある。少なくとも問題の根本的な解決には近づけない」という形で現在われわれが直面している問題に迫っていきます。このような方法的立場は、この本全体を貫く一つの柱になっているようにです。第二話「言葉について」では、伝達的手段としての言葉は動物も人間も共通にもっている。だが「人間と動物を分ける根本的な違い……それは言葉を使っているか」ということだ。ということも明らかになりました。で、「子どもたちにはっきりした言葉を育て、それを通じて思考をきたえることは、言葉の持つこの落し穴性を見ぬく訓練と別のものではないはず」だ、と問題を展開して、第三話の「自由について」では、「動物は本能、人間は理性で行動する。……こういう大ざっぱな裁断の仕方は、どうしても発展性がありません」と批判したうえで、動物心理学、動物行動学の成果にたつて、

「人間だけが、特殊化ゼロ、内的プログラムほとんどなしのままで生まれ」てくることを解明し、自由という人文学ないし社会学的カテゴリーに自然科学的なスポットを与えています。第四話「自然見たち」、第七話「養女たち」では、前者で人間の成長にとって、いわゆる社会的条件が不可欠なこと、後者では人間にもっとも近いといわれているチンパンジーを、もっとも人間らしい生活条件である家庭の中で養育しても、ついに人間にはならないということをつくかの貴重な実験、報告、観察結果をふまえて、「人間とはなにか」というこの本の核心に、動物の側から接近していきます。つぎの第五話では、人間の視覚というのは、むしろ見たがる心」ともいえる働きをすること、「見るということ」は単に受け身で機械的な働きかけであり、心身の諸部分が同時に忙しく活動している。……受け身でない知覚統合が……われわれの日常的な認識を支えている」という仕方です。「認識について」の問題をときどきくして、第六話「集団について」では、「群れを作る動物」であるサル、ハチ、人間の行動様式を比較検討し、「動物のあれこれから単純に人間のあ

り方への教訓を引き出したくなる」ことの危険性を指摘し、「人間は自分たちの集団のあり方を変えてゆける唯一の生物」であるのだから、「個人は集団に優先するという原則の中味を、もう一度考え直してみる必要がある」そう」だ、と問題をなげかけます。第八話は「性について」です。「性は生産の源泉である」と同時に「コミュニケーションの源泉」である。これは人間と動物に共通する性の特徴なのだが、人間だけは「他のすべての動物では性と繁殖とを結びつけている固い結び糸から」解放されることによって「コミュニケーション」としての性……の方をうんとふくらまして丹念精細にし、人間の性の独自性」である「愛の交通」を成立させたとして、さらに未来の性のあり方に筆を進めていきます。第九話では、「遊びについて」論じています。「人間だけが、一生にわたって遊ぶことのできる特殊な種」であり、人間が「一生にわたって遊ぶことは、進化の形態に合う基本的に自然な行動パターンだ」として、技術の進歩のめざましい現在、「人間の社会が、労働と遊び、現実と非現実の高次の融合を通じて、なお大きく成長しうることを暗示してはいないか」と遊びの意義の再評価を提案して

ます。最後の第十話は「これまでの話をまとめ上げるカナメとして」「想像について」の問題がとりあげられています。想像力というのは、人間の脳のもっている記憶と推理の両機能の相互作用によって生まれたのではないかと推論し、「脳の諸部分の発達が想像力の少くとも源泉の一つであり、想像をめぐらせそれに規制される行動の実行が更にそれらの脳の発達を促進する、という長い相互作用の過程が、人類の進化の中で想像の働きを育てた」のだから、と述べています。そして「想像力の使い方の大切な面の一つに、他人の状態も自分のことのようにありありと想像するという、いわば社会的想像力」があり、これが科学技術、芸術を創造、発展させたとし、最後に「われわれも、まだ何かになれる、何かとできる、という可能性をみつめて行動できることが、ごく当り前の意味での人間らしさではないのか、と私は思います」といって筆を擱いています。

誰だったか忘れましたが、「人間の解剖は猿の解剖の鍵となる。猿を知るのみでは人間は理解されない」といっていましたが、この本では動物——人間（心理学）——現代社会の直面する問題、という三者の緊張関係のな

かで、石原さんの人間の心を解剖する鋭いメスは、動物である人間と動物とは違った人間との接点と、それに内接する未開拓の、問題を多く残している部分をみごとにフワケし、その科学的解明をしてくれているように思えます。同じ和光大学の人間関係学科に籍をおくものとして、この成果を大切なものと感ぜないではいられません。それと同時に、漱石が文学論の序文でのべているつぎの言葉は、石原さんとこの「人間とはなにか」の中味とどうかわるのかな、とつい思わないではいられません。漱石はこういっています。「余はここに於て根本的に文学は如何なるものぞと云へる問題を解釈せんと決心したり。……余は下宿に立て籠りたり。一切の文学書を行李の底に収めたり。文学書を読んで文学の如何なるものなるかを知らんとするは血を以て血を洗うが如き手段たるを信じたればなり……」そして彼は心理（学）的、社会（学）的側面からの文学論研究を志したわけです。教育という営みは、子どもをあれやこれや解釈するのではなく、子どもを子ども自身の手でかえていくものだと思うのです。だから教育学は技術学だといわれるのですが、人間の科学的研究というのは、いままでの分

り方への教訓を引き出したくなる」ことの危険性を指摘し、「人間は自分たちの集団のあり方を変えてゆける唯一の生物」であるのだから、「個人は集団に優先するという原則の中味を、もう一度考え直してみる必要がある」そう」だ、と問題をなげかけます。第八話は「性について」です。「性は生産の源泉である」と同時に「コミュニケーションの源泉」である。これは人間と動物に共通する性の特徴なのだが、人間だけは「他のすべての動物では性と繁殖とを結びつけている固い結び糸から」解放されることによって「コミュニケーション」としての性……の方をうんとふくらまして丹念精細にし、人間の性の独自性」である「愛の交通」を成立させたとして、さらに未来の性のあり方に筆を進めていきます。第九話では、「遊びについて」論じています。「人間だけが、一生にわたって遊ぶことのできる特殊な種」であり、人間が「一生にわたって遊ぶことは、進化の形態に合う基本的に自然な行動パターンだ」として、技術の進歩のめざましい現在、「人間の社会が、労働と遊び、現実と非現実の高次の融合を通じて、なお大きく成長しうることを暗示してはいないか」と遊びの意義の再評価を提案して

「人間とはなにか」石原静子著、明治図書、六二〇円

